

セロ弾きのゴーシュ

宮沢賢治

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのです。ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出す第六交響曲（じゅうごうきょうきょく）の練習をしていました。トランペットは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いろ風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシュも口をりんと結んで眼（め）を皿（さら）のようにして楽譜（がくふ）を見つめながらも一心に弾いています。

にわかにはたつと楽長が両手を鳴らしました。みんなびたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。「セロがおくれた。トォテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額（あせ）に汗を出しながらやっといま云（い）われたところを通りました。ほっと安心しながら、つづけて弾いていますと楽長がまた手をぱつと拍（う）ちました。

「セロっ。糸（いと）が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなは気の毒（にく）そうにしてわざとじぶんの譜（こ）をのぞき込んだりじぶんの楽器をはじいて見たりしています。ゴーシュはあ

わてて糸を直しました。これはじつはゴーシュも悪いのですがセロもずいぶん悪いのです。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげて一生けん命です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと思っていると楽長がおどすような形をしてまたぱたと手を拍ちました。またかとゴーシュはどきっとしましたがありがたいことにはこんどは別の人でした。ゴーシュはそこでさつきじぶんのときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

そらと思つて弾き出したかと思うといきなり楽長が足をどんと踏んでどなり出しました。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっているぼくらがあの金杏鍛冶だの砂糖屋の丁稚なんかの寄り集りに負けてしまつたらいつたいわれわれの面目はどうなるんだ。おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたっと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひもを引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。光輝あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるようなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。では今日は練習はここまで、休んで六時にはかっきりボックスへ入ってくれ給え。」

みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマッチをすつたりどこかへ出て行つたりしました。ゴーシュはその粗末な箱みたいなセロをかかえて壁の方へ向いて口をまげてぼろぼろ涙をこぼしましたが、気をとり直してじぶんだけたったひとりいまったところをはじめからしずかにもいちど弾きはじめました。

その晩遅くゴーシュは何か大きな黒いものをしょってじぶんの家へ帰ってきました。家といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでいて午前には小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝をきつたり甘藍の虫をひろつたりしてひるすきになるといつも出て行っていたのです。ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけ

るとさっきの黒い包みをあげました。それは何でもありません。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床の上にそつと置くと、いきなり棚からコップをとってバケツの水をごくごくのみました。

それから頭を一つふって椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えては弾き一生けん命しまいまで行くともたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごう弾きつづけました。夜中もとうに過ぎてしまいはもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼もまるで血走つてとても物凄い顔つきになりいまにも倒れるかと思うように見えました。

そのとき誰かうしろの扉をとんと叩くものがありました。

「ホーシュ君か。」ゴーシュはねぼけたように叫びました。ところがすうと扉を押してはいって来たのはいまままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫でした。

ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬はひどいやな。」

「何だと」ゴーシュがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシュはひるからのむしゃくしゃを一ぺんにどなりつけました。

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもってきたものなど食うか。それからそのトマトだっておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしって。いままでもトマトの莖をかじったりけちらしたりしたのはおまえだろう。行ってしまえ。ねこめ。」

すると猫は肩をまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでにやにやわらって云いました。

「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらん下さい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」

セロ弾きはしゃくにさわってこのねこのやつどうしてくれようとしばらく考えました。

「いやご遠慮えんりょはありません。どうぞ。わたしはごうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

ゴーシュはすっかり真っ赤になってひるま樂長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかになんか気を覚えて云いました。
「では弾くよ。」

ゴーシュは何と思ったか扉びにかぎをかって窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしの消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室むのなかへ半分ほどはいってきました。

「何をひけど。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭ふいて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思つたかまずはんげちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎっしりつめました。それからまるで嵐あらしのような勢いきおいで「インドインドの虎狩とらがり」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチッと眼をしたかと思うとぼつと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶつつけましたが扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からばちばち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがってしばらくくしゃみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようにはせあるきだしました。ゴーシュはすっかり面白おもくなくなつてますます勢よくやり出しました。

「先生もうたくさんです。たくさんですよ。ご生ですからやめてください。これからもう先生のタクトなんかとりませんから。」

「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」

猫はくるしがってねあがつてまわったり壁にからだをくっつけたりしましたが壁についたあとにはしばらく青くひかるの

でした。しまいには猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴーシュをまわりました。

「ゴーシュもすこしぐるぐるして来ましたので、

「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようやくやめました。

すると猫もけろりとして

「先生、こんやの演奏はどうかしていますね。」と云いました。

セロ弾きはまたぐっとしゃくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口にくわえそれからマツチを一本とって

「ごうだい。工合をわるくしないかい。舌を出してごらん。」

猫はばかにしたように尖った長い舌をペロリと出しました。

「ははあ、少し荒れたね。」セロ弾きは云いながらいきなりマツチを舌でシュツとすってじぶんのたばこへつけました。さあ猫は愕いたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入り口の扉へ行つて頭でどんどぶつつかつてはよろよろとしてまた戻つて来てどんどぶつつかつてはよろよろまた戻つて来てまたぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようとなりました。

ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱のなかを走って行くのを見てちよつとわらいました。それから、やっとせいせいしたというようにぐつすりねむりました。

次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそっくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずこうやっていますと誰か屋根裏をこっこと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか。」

ゴージュが叫びますといきなり天井てんじやうの穴からぼろんと音がして一疋びきの灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかっこうでした。

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴージュが云いました。

「音楽を教わりたいのです。」

かっこう鳥はすまして云いました。

ゴージュは笑って

「音楽だと。おまえの歌は、かっこう、かっこうというだけじゃあないか。」

するとかっこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼なくのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかっこうとこうなくのとかっこうとこうなくのとは聞いていてもよほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかっこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかっているなら何もおれの処ところへ来なくてもいいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」

「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾ひいてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

ゴーシュはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかっこうはあわてて羽をばたばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなでないんです。」

「うるさいなあ。ではおまえやっごらん。」

「かっこうですよ。」かっこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから

「かっこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六交響樂（ちゅうきやうがく）も同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どうちがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりかっこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かっこうかっこうかっこうかっこうかっこうかっこうとつづけてひきました。するとかっこうはたいへんよろこんで途中（ちゆうちゆう）からかっこうかっこうかっこうかっこうかっこうについて叫（さけ）びました。それももう一生命からだをまげていつまでも叫ぶのです。

ゴーシュはどう手が痛くなって

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。するとかっこうは残念そうに眼（め）をつりあげてまだしばらくないていましたがやっ

「……かっこうかっこうかっこうかっこうか」と云ってやめました。

ゴーシュがすっかりおこってしまった、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わってるのではないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたったもう一ぺんおねがいです。どうか。」かっこうは頭を何べんもこんこん下げました。

「ではこれつきりだよ。」

ゴーシュは弓をかまえました。かっこうは「くっ」とひとつ息をして

「ではなるべく永くおねがいたします。」といつてまた一つおじぎをしました。

「いやになっちまうなあ。」ゴーシュはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかっこうはまたまるで本気になって「かっこうかっこうかっこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシュははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふっと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかっこうの方がいいような気がするのです。

「えいこんなばかなこととしていたらおれは鳥になってしまふんじゃないか。」とゴーシュはいきなりぴたりとセロをやめました。

するとかっこうはどしんと頭を叩たたかれたようにふらふらとしてそれからまたさっきのように

「かっこうかっこうかっこうかっこうかっかっかっかっ」と云いってやめました。それから恨うらめしそうにゴーシュを見て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでもどから血が出るまでは叫ぶんですよ。」と云いました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。もう出て行け。見ろ。夜があけるんじゃないか。」ゴーシュは窓を指さしました。

東のそらがぼうっと銀いろになってそこをまっ黒な雲が北の方へどんどん走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちょっとですから。」

かっこうはまた頭を下げました。

「黙だまれっ。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむしって朝飯に食ってしまうぞ。」ゴーシュはどんと床をふみました。

するとかっこうはにわかにはびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子ガラスにはげしく頭をぶつ

けてばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立って窓をあげようとしたが元来この窓はそんなにいつでもするする開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにがたがたしているうちにまたかっこうがぱつとぶつつかって下へ落ちました。見ると嘴くちばしのつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待っていろつたら。」ゴーシュがやっと二寸ばかり窓をあげたとき、かっこうは起きあがって何が何でもこんどこそというようにじつと窓の向うの東のそらを見つめて、あらん限りの力をこめた風でぱつと飛びたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝子につきあたってかっこうは下へ落ちたまましばらく身動きもせませんでした。つかまえてドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかっこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をぱつとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して碎け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかがっこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなってしまうました。ゴーシュはしばらく呆あきれたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室へやのすみへころがってしまいました。

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯いっぱいのんでいきますと、また扉とをこつこつ叩くものがあります。今夜は何が来てもゆうべのかっこうのようにはじめからおどかして追い払はらつてやろうと思つてコップをもつたま待ち構えて居おりますと、扉がすこしあいて一疋の狸たぬきの子がはいってきました。ゴーシュはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いてどんと足をふんで、

「こら、狸、おまえは狸汁たぬきじゆということを知っているか。」とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんとと床へ座すわったままだうもわからないというように首をまげて考えていましたが、しばらくたって

「狸汁たぬきじゆってばく知らない。」と云いました。ゴーシュはその顔を見て思わず吹き出ふそうとしましたが、まだ無理むりに恐こい顔かほをして、

「では教えてやろう。狸汁たぬきじゆというのはな。おまえのような狸たぬきをな、キャベジや塩しほとまぜてくたくたと煮にておれさまの食くうよ

うにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行って習えと云ったよ。」と云いました。そこでゴーシュもとうとう笑い出してしまいました。

「何を習えと云ったんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡いんだよ。」

狸の子は俄に勢がついたように一足前へ出ました。

「ぼくは小太鼓の係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いと云われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『愉快な馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快な馬車屋ってジャズか。」

「ああこの譜だよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手にとってわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシュは狸の子がどうするのかと思っちら

ちらそつちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもってセロの駒の下のところを拍子をとってぽんぽん叩きはじめました。それがなかなかうまいので

弾いているうちにゴーシュはこれは面白いぞと思いました。

おしまいまでひいてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやっと思いついたというように云いました。

「ゴーシュさんはこの二番目の糸をひくときはききたいに遅れるねえ。なんだかぼくがつまずくようになるよ。」

ゴーシュははっとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたってからでないと言音が出ないような気がゆうべからしていたのです。

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」とゴーシュはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていました。

「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」

「いいとも弾くよ。」ゴーシュははじめました。狸の子はさっきのようにとんと叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしよってゴムテープではちんとめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行ってしまいました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡って元気をとり戻そうと急いでねどこへもぐり込みました。

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままうとうとしていますとまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一びきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのくらいしかないのでゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわられたろうというようにきよろきよろしながらゴーシュの前に来て、青い栗の実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。

「先生、この児があんばいがわるくて死にそうでございますが先生慈悲になおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむっとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまっていましたがまた思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、兎さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪の

みみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはいえぬことではあなまり情ないことではございません。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんどなおしてやったことはないからな。もつとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行ったがね。はほん。」ゴージュは呆あきれてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野鼠のねずみのお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児こはどうせ病気になるならもつと早くなればよかった。さっきまであれ位ぐうぐうと鳴らしておいでになったのに、病気になるといっしょにびたつと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴージュはびつくりして叫さけびました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういうわけだ。それは。」

野ねずみは眼めを片手でこすりこすり云いました。

「はい、こころのものは病気になるるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療なすのでございます。」

「すると療なるのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持ちですぐ療なる方もあればうちへ帰ってから療なる方もあります。」

「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病気がなおるといふのか。よし。わかったよ。やってやろう。」ゴージュはちょっとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔あなから中へ入れてしまいました。

「わたしもいっしょについて行きます。どこの病院でもそうですから。」おっかさんの野ねずみはきちがいのようになってセロに飛びつきました。

「おまえさんはいるかね。」セロ弾きはおっかさんの野ねずみをセロの孔からくぐりしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

りながらどうしてそれを運びに难道参れましょう。」と云いました。

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちょっと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」

ゴーシュはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしって野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかのようになって泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「あああ。鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシュはねどこへどっか倒れてすぐぐうぐうねむってしまいました。それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの裏にある控室へみんなぱっと顔をほてらしてめいめい楽器をもって、ぞろぞろホールの舞台から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手の音がまだ嵐のように鳴って居ります。楽長はポケットへ手をつつ込んで拍手なんかどうでもいいというようにそのそみん間の間を歩きまわっていました。じつはどうして嬉しさでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマツチをすったり楽器をケースへ入れたりしました。

ホールはまだばちばち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなって何だかこわいような手がつけられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいつて来ました。

「アンコールをやっていきますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」

すると楽長がきつとなって答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むようには行くもんでないんです。」

「では楽長さん出て一寸挨拶してください。」

「だめだ。おい、ゴーシュ君、何か出て弾いてやってくれ。」

「わたしがですか。」ゴーシュは呆氣にとられました。

「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて云いました。

「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシュに持たせて扉をあけるといきなり舞台へゴーシュを押し出してしまいました。ゴーシュがその孔のあいたセロをもってじつに困ってしまつて舞台へ出るとみんなはそれを見ろというように一そうひどく手を叩きました。わあと叫んだものもあるようでした。

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度の虎狩をひいてやるから。」ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

それからあの猫の来たときのようにまるで怒った象のような勢で虎狩りを弾きました。ところが聴衆はしいんとなつて一生けん命聞いています。ゴーシュはどんどん弾きました。猫が切ながつてばちばち火花を出したところも過ぎました。扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終わるとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちようどその猫のようにすばやくセロをもって楽屋へ逃げ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあつたあとのように眼をじつとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシュはやぶれかぶれだと思つてみんなの間をさつさとおるいて行つて向うの長椅子へどっかりとからだをおろして足を組んですわりました。

するとみんなが一ぺんに顔をこつちへ向けてゴーシュを見ましたがやはりまじめでべつにわらっているようでもありませんでした。

「こんなやばいな晩だなあ。」

ゴーシュは思いました。ところが楽長は立つて云いました。

「ゴーシュ君、よかつたぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり本気になつて聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」仲間もみんな立って来て「よかつたぜ」とゴーシュに云いました。

「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通の人なら死んでしまうからな。」楽長が向うで云っていました。その晩遅くゴーシュは自分のうちへ帰つて来ました。

そしてまた水がぶがぶ呑みましました。それから窓をあけていつかっこうの飛んで行ったと思った遠くのそらをながめながら

「ああかっこう。あのときはすまなかつたなあ。おれは怒ったんじゃなかつたんだ。」と云いました。